要　　旨

１　作成の背景

高大接続とは、高校と大学を区切ること（非連続性）とつなぐこと（連続性）の両面をもちつつ、高校から大学への学習者の移行を促すことを意味する。その問題領域は、入学者選抜等の構造的側面、教育内容や教育方法等の内容的側面、教員の協働や進路指導等の運営的側面の３つからなる。ところが、従来の高大接続に関する議論は、入学者選抜が中心であった。それは、1990 年代初頭までは、入学者選抜が高大接続の要として機能していたことが大きい。しかし現在、高大接続を入学者選抜として論ずるのみでは不十分である。必要なのは、教育接続（入学者選抜の一点にととどまらず、高校と大学とが、教育内容・方法や学力・能力等において多面的に接続すること）という観点から高大接続の在り方を検討することである。こうした認識のもと、本報告は作成された。

２　現状および問題点

高大接続をとりまく状況の変化は、1992 年をピークとする 18 歳人口の減少に起因する。大学に関しては、大学入学者定員増に伴う大学進学率の上昇、その後に生じた大学定員未充足のなかで、入学者の資質・能力は多様化・低下した。現在、高校卒業者の大学進学率は約 55％だが、そのうち一般入試による入学者は約 50％でしかなく、しかも、一般入試の科目削減が進んだ。したがって、入学者選抜による大学教育の質保証は容易ではなくなった。他方、高校に関しては、大学進学が相対的に容易になったうえに、教科・科目の履修の自由化が進み、卒業者の学力保障が十分なされなくなった。

そのため高大の「教育接続」の検討が求められるが、それへの十分な対応ができていない。例えば、2010 年代からの教育政策では、当初は高校教育、大学教育、大学入学者選抜の三位一体改革がめざされていたものの、具体化するなかで大学入学者選抜に焦点化していき、現在、高大接続に関する議論は進展をみせていない。こうした状況に鑑み、本報告では、教育接続という観点からわが国の高大接続の現状を把握し、今後の検討のための論点の提起を課題とした。

３　報告の内容

本報告の内容は、大きく５点にまとめることができる。

(1)　高大接続に関する政策動向

1990 年代から現在までの高大接続に関する政策を、中央教育審議会の答申を中心に検討した。1990 年代後半から 2000 年代にかけて、いったんは教育内容・方法や高大接続テストなどによる教育接続という提案があったものの、2010 年代初頭からは、入学者選抜の改革によって高校教育と大学教育を接続するという議論に転換し、しかも具体的な改革は頓挫したという経緯がある。

(2)　日本学術会議における教育接続に関するこれまでの議論の検討

高大接続の教育内容・方法の観点からの議論が少ないなか、日本学術会議では、高校の教科と大学のディシプリンの関係からの「提言」や「報告」が発出されてきた。それらは、１.新たな教科や教育内容の提案、２.ディシプリンにもとづく教科の性格づけ、３.大学入試への提案に分類される。大学教育の質保証という点から、33 のディシプリンにおいて「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」が作成されている。ただ、いずれも個別の教科とディシプリンの関係にとどまり、それらを包括した高大の教育接続の在り方の検討には至っておらず、それを今後の課題とする。

(3)　高大接続を把握するための視点

大学の高校化、高校の大学化という状況が進行している状況を踏まえ、今後、教育接続を検討する際に必要な見取り図として、３つの次元を提示することができる。１.教育内容、２.高校の学習（学力水準、学力の範囲、教科の種別など）における共通性と多様性、３.接続のタイムスパン（教育接続の評価を大学４年間のどの時点で行うか）である。さらに、１.教育内容に関しては、ア.高校での履修教科と大学入試の科目との関係、イ.高校の教科と大学のディシプリンとの連続性・非連続性、ウ.習得すべき学力（知識・技能か、能力か）の３側面からの検討が求められる。この構造的見取り図にもとづけば、従来の高大接続の議論がいかに限定的であったかがわかる。

(4)　学習者の移行からみた高大接続の現状

高大の教育接続に関する議論の前提として、学習者の高校から大学への移行状況を把握する必要がある。本報告では、これまでの調査研究から、地域、性別、高校の学科、高校の入学難易度、学習者の社会階層、附属・系列高校からの進学、マイノリティへの配慮などに関する実態を提示した。また、ほぼ未検討であった、過年度卒業者、社会人、高等学校卒業程度認定試験経由の受験者などの移行状況の把握が重要であることを指摘した。そして、教育内容・選抜方法・学習者の社会的属性などによって高校から大学への移行パターンが細かく断片化し、多様な高大接続が並存するようになっている状況が明らかになり、それを本報告では「セグメント化」と命名した。

(5)　高校教育・大学教育・大学入学者選抜のセグメント化

高校教育、大学教育、大学入学者選抜がセグメント化しているとはいえ、一定の原則のもとに、多様性を展開していくべきと考える。学習者の視点に立っての教育機会を拡大すること、特にセグメント化の進行がもたらすと危惧される社会的な格差の拡大と特定層の排除に対し、格差の縮小と包摂性の向上を追求するという方向性を議論の前提として提示したい。本報告が提示した高大の教育接続を考える見取り図を参照しつつ、高校・大学の関連する分野間での教育接続に関するボトムアップ的な協議を重ね、それにもとづき、全体としてのわが国の高大の教育接続の在り方の検討が必要と考える。